

マルコ 5 章 21～24、35～43 節「ただ信じていなさい」

題とした「ただ信じていなさい」ということばは、今日の箇所に記載されているイエス様がおっしゃったことばです。どんな状況でイエス様がそうおっしゃったのか、そのイエス様のことばは私たちにとってどのような意味があるのか、聖書のみことばに聞いていきましょう。

1. ヤイロの懇願（：21～24）

直前の箇所に記されている出来事から、主イエス様の権威について知ることができます。自然界も悪霊も主イエス様に従いました。さらにイエス様の権威が示されることとなります。

大勢の群衆がイエス様のもとに集まって来ました。その群衆の中を、必死になって人々をかき分けて、一人の人がイエス様の前にやって来ました。この人は会堂司の一人でヤイロという人です。ヤイロはイエス様の足もとにひれ伏して懇願しました。23 節。

娘が重い病気で、これまでの看病、治療もむなしく、死にそうになっていたのです。ヤイロは病気の娘を前にして、人の無力さを痛いほど感じていたことでしょう。病人を何人も癒しているというこのイエスが手を置いてくれるならば、自分の娘も救われるのではないかと期待して、必死にお願いしました。

彼の必死さは、彼が会堂司であったことを考えるとよく分かります。ユダヤ人社会で指導的な立場にある彼が、大勢の群衆のいるところでひれ伏して、なりふり構わず必死にイエス様に懇願しました。また、すでにイエス様はユダヤの宗教指導者たちから厳しい目で見られています。そのイエス様を会堂司が懇願して自分の家に招くということは、指導者たちには裏切り行為と思われるでしょう。しかし、ヤイロは勇気と覚悟を持ってイエス様の足もとにひれ伏して、懇願しました。

「娘が救われて生きられるように」との真剣な願いに、イエス様は確かに答えてくださいます。ヤイロの願いを聞いて、一緒に彼の家に向かいました。ヤイロの必死で強引とも思えるような求めに答えて、彼の家へと向いました。そこには神様の導きと目的があったことがこの後に分かります。

ここまではヤイロの願い通りに進んでいました。ところが、突然割って入る思いがけない出来事によって崩れ去ることになります。ヤイロと共に彼の家に向かうイエス様の周りに大勢の群衆が押し迫って来ました。なかなか進むことができません。そのうちにイエス様は立ち止まり、周囲を見回して、そこに進み出た一人の女性の話を聞きます。ヤイロは気が気ではなかったでしょう。ぐずぐずしてはられないのに、イエス様はその女性と言葉を交わしています。

人生には思わぬことが起こるものです。緊急の時にも起こります。私たちの思い通りにいかないことがあるのです。

2. 絶望の中で（：35～37）

イエス様がそこに立ち止まっているときに、ヤイロの家から人々が来て、告げました。「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか」。なんということでしょうか。「間に合わなかった。ダメだった」と、ヤイロはその場に崩れ落ちるような思いだったでしょう。

しかし、ヤイロが絶望のどん底に突き落とされたその時、イエス様は不思議なことを言われました。36 節。もう娘は死んでしまった、今さら何を信じていると言うのかと思ったことでしょう。もうお手間をとらす必要はなくなりましたとイエス様に言おうとしたところだったでしょう。しかし、イエス様は 3 人の弟子だけを伴って、なおもヤイロの家に向かって行くのです。ヤイロはどう考えたら良いのか分からなかったことでしょう。

しかし、イエス様の足取りは確信に満ちているのです。ここまでは、イエス様はヤイロの願いに答えて、一緒について行くということでした。しかし、ここからはイエス様がヤイロを引っ張っていくということに変わっています。ヤイロの家と共に行くということを超えて、恵み深い神様の御業がなされるころへ連れて行くのです。

ここに神様の導きと目的があったことが分かります。娘が死んでしまっ、人間的にはもう何もできない状態になりました。それでも「恐れなくて、ただ信じていなさい」と言われる主イエス様がおられて、その主イエス様に従って行くところで、神様の御業がなされるのです。自分の功績を誇るなど一切できない中で、

神様の救いの御業だけがほめたたえられるのです。

3. 死にも勝利するお方（：38～43）

イエス様たちはヤイロの家に着きました。家にはすでに人々が集まり、会堂司の娘の死を嘆き、取り乱し、泣いたりわめいたりしていました。その様子をご覧になったイエス様はまた不思議なことを言われます。

39節。それを聞いた人々は「あざ笑った」とあります。娘が死んだのは間違いのないことでした。何を馬鹿なことと言っているのか、そんなことを言っても何の慰めにもならない、ということでしょう。

娘は確かに死んでしまったのですが、しかしイエス様は、死を見る普通の見方をしていません。「眠っている」と言われます。眠っているということは、いつか目覚めるといことです。イエス様においては、死は眠りであり、再び起き上がるのです。つまり、死んですべてが終わりではなく復活するということです。そのことを信じていることができるかと、ここで問われているのではないのでしょうか。

イエス様はあざ笑っている人々を外に出し、娘の両親と3人の弟子だけを連れて、娘のいる部屋に入って行かれました。その場にいたのは7人だけでした。41～42節。

律法では、死人に触れるなら汚れるとされていましたが、イエス様は少女の手を取って、「タリタ、クム」と言われました。このことばは、当時のユダヤ人たちが日常会話で使っていたアラム語です。その意味は書かれているように、「少女よ、あなたに言う。起きなさい」です。眠っている子どもを起こすときと同じようにイエス様は言ったのです。すると、死んだ娘が生き返りました。まさに眠っていた子どもが目覚めたように起き上がりました。驚くべき奇蹟が起こりました。その場にいた両親や3人の弟子たちにとって、そのときにイエス様が言われたことばが大変印象的だったのでしょうか。ギリシヤ語で書かれた福音書にイエス様が言われたことばをそのまま記録して、異邦人読者のために「訳すと」とその意味を説明したのでしょうか。

この出来事が聖書に記されているのは、単にイエス様がすごい奇蹟を行ったということを伝えているのではありません。このように死をも克服される、人のいのちに対しても権威を持っておられるイエス様はいったいどういうお方なのかという、信仰を問いかけているのです。

ヤイロがイエス様に懇願したことばの中に「娘が救われて生きられるように」とありました。ヤイロは死にかけている娘の病気が癒されて生きられるようにと願ったのでした。しかし、イエス様はこの出来事を通して、「救われて生きられる」ということの意味を示してくださったのだと思います。人のいのちに対する神様の権威と支配を表しています。そして、神様が私たち一人ひとりを愛し、救おうとしておられることを教えているのです。

人は皆死に向かっています。神様から離れている人は霊的には死んだ状態です。しかし、主イエス様によって救われて生きられるのです。自ら十字架で死なれたけれども三日目によみがえられた救い主イエス様によって、私たちにも永遠のいのちが与えます。このキリスト教信仰の中心は、ただただ信じるほかにない事柄です。イエス様は、「恐れないうで、ただ信じていなさい」と私たちにも言われるのです。

起こってくる状況に私たちは恐れやすく、恐れは心を支配してしまいます。そんな中でも、救いを求める真剣な願いに、イエス様は応えて、救いを与えてくださいます。また、イエス様を信じていても、困難な状況に信仰の目が覆われて、動揺してしまうことがあります。しかし、そのような恐れに支配されてしまう私たちを主イエス様は、「恐れ続けないうで、わたしを信じていなさい」と招いてくださいます。人の病もいのちも支配しておられる方が一緒にいてくださることを思い起こさせてくださいます。主イエス様は私たちが救われて、新しいいのちに生きるようにしてくださいます。そして、やがてイエス様が再び来られるときに、私たちもよみがえり、永遠の御国に入ることができる希望を与えてくださいます。救い主であるご自身を信じていなさいと招き、そして確かに答えてくださるのです。

イエス様に救いを求めましょう。罪を赦してくださり、永遠のいのちを与えてくださる救い主イエス様を信じましょう。私たちを救い、本当の意味で生かしてくださるイエス様を信じていましょう。